



M
A
M
O
R
U

M
A
N
I
A

R
e
p
r
i
n
t
e
d

E
d
i
t
i
o
n

SHINICHIRO INOUE
MAMORU NAGANO

SEIKAISHA

R
e
p
r
i
n
t
e
d

E
d
i
t
i
o
n

**M
A
M
O
R
U

M
A
N
I
A**

SHINICHIRO INOUE
MAMORU NAGANO

SEIKAISHA

MAMORU MANIA Reprinted Editionへのまえがき

005

プロローグ

019

MAMORU MANIA

023

いま描かれるべき「ファイブスター物語」

199

特別寄稿

フアテイマを嫌悪する 富野由悠季

おとぎ話な3年間 太田修

10年を駆けぬけた、永遠の10代 重信裕之

ファイブスター物語 年表

MAMORU MANIA 復刊に当たって 永野護

MAMORU MANIA

Reprinted Editionへのまえがき

「や、やられた！ やられたよ、ダグラス・カイエン！」

「ファイブスター物語」の読者の皆さまにはこれ以上の説明は無用だろうから、私がなぜこんな叫び声を上げているかについての言及は、あえて必要ないはずだ。

長きに及んだ「魔道大戦」もいよいよクライマックス。いま永野護の筆はノリにノッている。

この原稿を書いている現在——洋画ならPresentと字幕が出る場面——は2026年3月。

「ファイブスター物語」の連載開始からちょうど40年が経った。自分の記憶のなかには、あの激動の日々が生々しく息づいている。本書のなかに記されている通り、連載第1話の原稿を手にしたときの興奮は、いまでも忘れることができない。あの芝居があったセリフを電話で永野護に伝えたことを含めて、私にとってまさに魔法の1日だった。

「月刊Newtype」の編集者として、そして永野護の担当者として過ごした日々のなかでも、

最も鮮烈な思い出だ。

そう、連載開始40周年。この節目のタイミングで、この「マモルマニア」が増補復刻版として刊行されることとなった。

本書について簡単に説明しておかなければならない。オリジナル版は1997年に出版されたが、長らく書店店頭から消え、「幻の本」のような存在だった。

実に不思議な造本で、表紙には永野護の絵——タイトルは「THE SILVER ID E」——の上に縦書きで小さくMAMORU MANIAと記されているだけ。帯がないので、開いてみるまで、読者は何が書かれているか予想することができない。要するに本の存在をあらかじめ知っている人間——すなわち永野護と「ファイブスター物語」のファン——のためだけに作られた、混ぜ物なし果汁100%的な作りの書籍だ。いや、正確には書籍とは言えないだろう。表4にはバーコードもない。現在の基準では書店で流通することは不可能だ。いったいどうやって流通させていたのか。もしかしたらグッズ扱いだったのか。著者であるはずの私自身もわからない。

ちなみに「MAMORU MANIA」という言葉は、1960年代にビートルズを熱狂的に支持する若者たちのことを指す「BEATLE MANIA」から拝借したものだという。

オリジナル版の編集と装丁は佐藤良悦さとうりょうよくによるもの。「ファイブスター物語」が連載されて

いる「月刊NewType」の實質的編集長——周りにくい表現で申し訳なく。「Newtype」創刊時の株式会社ザテレビジョンから刊行される雑誌の編集長は、「週刊ザテレビジョン」をはじめ、公式表記ではすべて井川浩いがわひろしとなっている。しかし実際に編集長として雑誌を作っていたのは公式には副編集長とされる佐藤良悦たち株式会社ザテレビジョンの編集者たち。ここで実質編集長と記すのはそのためだ——「マモルマニア」刊行時には自身の会社トイズプレスで設立していた。掲載された私の原稿もトイズプレス社で刊行されていた不定期誌「キャラクターズプラス」などで連載していたものだ。

「マモルマニア」は私の原稿が基盤にはなっているが、富野とみの由悠季ゆゆうき監督はじめ「月刊Newtype」歴代編集長の原稿などが収められ、書籍ではなく雑誌の感覚で編集されている。創刊41年を迎えた「月刊Newtype」の基本フォーマットを作ったのが佐藤良悦であり、彼は雑誌作りにおいては天才的な才能を持っていた。この本が書籍的ではなく雑誌的であるのも、そのためなのだろう。

オリジナル版に掲載されている私の原稿は1991年から1994年に書かれたものだが、この増補版には2001年に永野護と物語の関係をテーマに書いた原稿を追加で掲載することとした。この文章のテーマを拡大解釈すれば、永野護が2013年に起こした「ファイブ

スター物語」の大転換を予言しているかのようにも読め、書いた自分自身が怖くなったからだ。

さらにこの長い前書きでは、オリジナル版「マモルマニア」刊行後のエピソードをいくつか期しておきたい。

「ファイブスター物語」を2年間休載してオリジナル劇場アニメを作りたい、と永野護から提案を受けたのは2003年頃。永野護が監督・作画を担当し、ひとりて1本の映画を作る、とのことだった。

これには理由がある。この前年、新海誠監督がほぼひとりて作り上げた「ほしのこえ」が大きな話題を呼んでいた。公開は2002年2月2日。下北沢トリウッドという単館上映。作品の反響は大きく、上映後に発売されたDVDは、発売初日で初回ロット3万枚を完売した。

フルデジタルで作られたこの作品の登場により、ひとりでも劇場アニメ制作が可能になる時代が訪れたことが証明されたのだ。このムーブメントに永野護が刺激を受けたことは間違いない。

最初に提示されたアイデアは、30分ほどの短編アニメ。「ほしのこえ」の上映時間をベンチマークにしたものだろう。これを2年間かけて作るので、その間「ファイブスター物語」を